

## 白滝ジオパーク再認定審査報告書

【日程】2014年（平成26年）10月15日～16日

### 【審査員】

中川和之（日本ジオパーク委員会委員）  
目代邦康（日本ジオパーク委員会委員）  
栗原憲一（日本ジオパークネットワーク現地審査員）

### 【主な参加者（所属）】

佐々木修一（遠軽町長）、高橋義久（総務部長）、石原 徹（農政林務課主幹）、長原裕一（商工観光課主幹）、倉内健一（商工観光課係長）、高橋昌宏（総務課防災担当係長）、玉置昌史（情報管財課主任・防災担当）、高松慎司（企画課主任・行政改革担当）、只野博之（丸瀬布総合支所産業課主幹）、小山信芳（丸瀬布総合支所産業係長）、河原英男（教育長）、浅利 誠（教育専門相談員）、中南秀隆（社会教育課係長）、喜田和孝（丸瀬布教育センター）、木村英明（ジオパーク交流センター名誉館長）、和田恵治（北海道教育大旭川校教授）、加藤孝幸（アースサイエンス（株））、矢木 優（観光協会白滝支部）、的場孝文（（有）白楊舎）、杉山俊明（遠軽高校地理歴史科教諭）、後藤 裕（理事長）、高橋明男（理事）、田中 茂（ジオガイド）、井上邦義（ジオガイド）、田中金蔵（ジオガイド）、古寺 博（ジオガイド）、本吉春雄（NPO オホーツククラスター）、佐藤正美（丸瀬布昆虫同好会長）、鴻上栄治（ジオパーク推進課長）、堀島英俊（ジオパーク推進課主幹）、松村愉文（ジオパーク推進課係長（兼））、瀬下直人（ジオパーク推進課主任（兼））、熊谷誠（ジオパーク推進課主任）

### 【見学地点】

ジオパーク交流センター、遠軽町埋蔵文化財センター、太平ジオパークロード、いこいの森、丸瀬布昆虫生態館、山彦の滝、風穴、遠軽高校、河岸段丘と遺跡、瞰望岩

### 【現地審査のまとめ】

白滝ジオパークは、日本最大級の黒曜石産地を含む遠軽町全域をエリアとしている。220万年前の火山活動によって形成された黒曜石は、約3万年前にこの地に暮らした旧石器人に活用されていた。火砕流台地が崩れたガレ場には風穴が形成され、林材として活用され

たアカエゾマツやコケモモ群落が分布し、ナキウサギの生育地となるなど、風穴特有の生態系が成立している。広範囲にわたって良好な自然環境が残されており、貴重な地質や地形、生態系が存在する場所である。さらに、インカルシ（アイヌ語で見張りをするところの意味。瞰望岩。国指定名勝ピリカノカの一つ）やかつての金鉱山など、アイヌ文化や、大地と人々の暮らしとの関係を知ることのできるサイトも数多く存在する。

このジオパークを象徴する黒曜石に関しては、その保全がよく考えられ、実施されている。また、遠軽町の生物多様性地域戦略では、ジオパーク関係者がその作成に協力するなど、生物多様性の基盤として、地質・地形を保全する必要があることも意識されている。白滝小学校および遠軽高校で実施されている黒曜石などを活用した教育レベルは非常に高い。関係者間での情報交換が徐々にすすみ、観光や防災といった課題に関しては、今後ジオパークを活用する場面が増えていくことが予想される。一方で、ジオツアーの実績はまだ乏しく、ガイド間の交流も少ない。今後、旧町村単位のエリア間をつなぐジオストーリーを構築し、全てのジオサイトを活用したガイドが展開できるようになることが望まれる。

NPO組織を中心に置こうとした運営体制は、当初の計画通りには進まなかったが、遠軽町が事務局業務を行い、一定の事業が推進されている。このような状態になった原因の解明とそれを踏まえた改善計画が必要である。次年度は、地質学を専門とする専門員を採用する予定なので、活動のさらなる充実が図られることが期待できる。保全や教育活動においては、日本のジオパークの中でも先駆的になり得る取組みも行われており、今後はその成果を積極的にネットワークへ発表・情報共有することが必要である。そうした活動を通して、ネットワークへの貢献を期待したい。特に、道内ジオパーク間で連携をとり、より質の高いジオパーク活動を進めていただきたい。

多くの課題はあるものの、引き続き日本ジオパークネットワークの一員に相応しい活動をし続けることができると判断し、再認定とする。

### (1) ジオサイトと保全

黒曜石露頭については、営林署とも連携した上で、保護エリアと保全エリアとに区分し、物理的な制約と今後の活用方針が考えられている。現在策定中の遠軽町生物多様性地域戦略では、ジオパークについても記述され、地形・地質の特徴が生物多様性と深く関わっていることを盛り込んでいる事は特筆すべき点である。今後は、黒曜石だけでなく風穴などのサイトの保全に対する考え方も整理しながら、ジオ多様性地域戦略を構築することで、地球科学的現象の保全に関する先駆的な取組みになることが期待される。

地域に残るあるいは消えてしまった文化も保全の対象である。古い鉱山などの和人の歴史や、地名などに残るアイヌ文化、さらにインカルシ（瞰望岩）など重層的に意味づけさ

れている場所の保全は、地球科学的な価値だけでなく、多面的に評価し保全の方策を検討していただきたい。

町民の手作りから始まった丸瀬布昆虫生態館と昆虫同好会の30年余にわたる昆虫類の保護・保全活動が今も積極的に行われている。特に近年では、絶滅の危機に瀕しているアサマジミ（蝶類）を遠軽町で発見するなど、住民の宝となる昆虫類の発見もなされている。ジオパーク内でのこういった団体、関係者の交流を今後すすめることで、地域資源の掘り起こしと活用が期待される。

## **(2) 教育・研究活動**

白滝小学校を対象とした「石育」は、全校生徒30人という小規模校の利点を生かし、全学年で黒曜石を社会科および理科教育の観点から学習する独創性のあるカリキュラムとなっている。また、遠軽高校では、ジオパーク推進係とも連携しながら「ふるさと学」と「オホーツク風土研究」が実施されている。特に、「オホーツク風土研究」では、遠軽の地形・地質・気候の特徴と災害の歴史（水害、大火など）との関係について学習することができるもので、非常にレベルが高いものとなっている。今後は、白滝エリアの特徴である黒曜石だけでなく、丸瀬布、生田原、遠軽エリアそれぞれの特徴的な石やジオ的資源を使った「石育」に発展させ、エリア全体の子供たちに自身の住んでいる地域固有の財産を見出す学習になることを期待したい。

## **(3) 管理組織・運営体制**

運営体制は、当初の予定通り進んでいない。前回審査時には、NPO法人白滝ジオパークサポートセンターがジオパークの運営を担うという「約束」をした以上、その方向性を変更するならば、なぜそうなったのかをしっかりと分析する必要があり、それが全くなされないまま再審査に至ってしまった点は反省すべきである。ただ、現在では、関係者で現状の問題点を認識し、解決策を見出そうと努力し、具体策をまとめようとしていることは確認できた。また、次年度に地質専門員を採用する予定であるなど、ジオパーク活動の充実化を図ろうとしている点は評価できる。

運営体制については、過去と現在の状況をしっかり分析した上で、各地区の観光協会や商工会なども含め関係者間で熟議しながら、今後のより良い体制を構築する必要がある。

## **(4) 地域の持続発展のジオツーリズム**

観光協会との連携については、ジオパークのマスコットを活用したイベントの開催や、ご当地グルメの開発などが行われている。しかし、ジオツアーの実績はまだ乏しく、この

地域に国内外から人を呼ぶという意識が低く、ジオガイドが経済的に自立して活動をしていくのはまだ困難な状況である。ガイドは白滝エリアと丸瀬布エリアにそれぞれ存在するが、互いのエリアをまたぐガイドは実施されていない。白滝のガイドはジオストーリー、丸瀬布は観光地としてガイディング能力に長けており、今後は互いのもつ良さを共有できるような交流事業の展開が望まれる。

4つのエリアそれぞれのジオストーリーは考えられているが、全てのエリアをつなぐジオストーリーはまだ構築されていない。しかし、その素材は十分にある。今後、エリア間をつなぐジオストーリーと一緒に作りだしていくことで、全てのジオサイトを活用したガイドが出来るようになるであろう。

#### **(5) 国際対応及びネットワーク活動**

地域内では特に外国人向けの情報発信は行われていない。世界認定を目指さなくとも、外国人来訪者向けの対応が必要である。「合気道発祥の地」としての国際交流の経験も活かして、国際的な情報発信を心がけてほしい。

日本国内のジオパークネットワークの中では、この地域の活動が十分に知られていない。保全や教育活動においては、日本のジオパークの中でも先駆的となり得る取組みもあり、今後は、地域の実践やそこから得られた知見を積極的にネットワークで共有し、日本国内、また世界のジオパークネットワークへの貢献を図ってほしい。まずは、道内のジオパークでツーリズムやガイド交流などの連携強化が望まれる。

#### **(6) 防災・安全**

防災ハザードマップと遺跡の立地場所との関係から、先住民の暮らしの知恵を伝えながら防災について考える学習などが遠軽高校で実施され、生徒達は自身の住む場所について考えられるようになっていく。また、ジオサイトだけでなく避難場所もフォト対象とするフォトロゲイニングイベントが実施され、ジオパーク的視点を生かしたツーリズム展開も図られている。今後もこのようなジオパークの活動を行うことで、地域住民が災害の背景にある地形・地質・気候の特徴を知り、自身の住んでいる場所について考えるきっかけとなるよう期待したい。